

僕は、小さい頃から卓球をしている。卓球の練習にラリーという練習がある。ラリーとは球をなるべく長く続ける練習の事だ。

税はラリーに似ていると思う。僕たちが打った税金というピンポン球を公共サービスという形で国や市町村が打ち返してくれているように思える。

例えば、僕たちが払っている十パーセントの消費税は社会保障という形で返ってきている。社会保障は国の歳出の三分の一を占める。社会保障は国民に、生活できる最低水準を確保させるための政策である。医療などもその中に入る。高齢化が進む日本では、社会保障は、なくてはならない政策だと思う。

僕たちが、学校で使っている机や教科書、校舎などにも税金が使われている。教科書の裏側には、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」と書かれている。改めて読んでみると、税金のありがたさが分かってくる。税金がなかったら、教科書は無料でもらえていない。教科書以外にも僕の身の回りには税金が使われているものがたくさんある。僕の通っている新庄中学校の総工費は六億七千七百万円である。これらは、大人たちが、期待というピンポン球を僕たちに打ってくれているのだと思う。その期待に応えられるように頑張りたい。大人になったら、今度は僕たちがピンポン球を打ってあげられるようにしたい。

その税金のラリーはいつから繋がってきているのか。始めはどのようなものだったのか。疑問がわいてきた。日本で始めて本格的な税の制度ができたのは、飛鳥時代の事だった。僕は今から一五〇〇年も前に税ができていたことに驚いた。しかし、今とは少し違う点がある。それは、お金ではなく収穫したものや特産物、労働を納めるという点である。現金で納めるようになったのは、一八七三年の地租改正の時である。政府が土地の値段を決め、その値段の三パーセントを土地の持ち主が現金で納めるというものである。所得税は、一八八七年から、法人税は、一八九九年から導入されている。僕たちにも身近な消費税は一九八九年に導入されている。消費税は税の歴史からすると、かなり最近から始まったことが分かった。税の歴史は古く税のラリーもずっと続いてきていることが分かった。

一五〇〇年前から続く「税のラリー」。この税のラリーがこれからの一五〇〇年も続いて行ってほしい。そのために僕は、納税の義務を果たしていきたい。